# 百々裏話（11）

おもてあきら

**翁**

観世流の〝とうとうたらり〟と金春流などの〝どうどうたらり〟と、どちらが翁の詞章の原形であるかを最初に取上げたことに因んで、法華五部九巻書序が〝とうとう〟の部分に「百々」の文字を宛てているのを借用し、百々裏話などという妙な表題を付けたものであつたが、その百々裏話もどうやら年を越した。過去十回、トウトウたる名論よりはドウドウめぐりの迷論の方が多かつたらしいが、誉めてくれた人が三人だけいる。それでいい気になつた訳ではないが、本年も書けたら書続けていきたいと思つている。

さて、〝どうどう〟と濁つて謡う金春流などの方が古い形であろうと昨年正月のこの稿で推定したのであるが、この推定はあたつていたようである。一年間に翁についての幾つかの新資料を調べることが出来たが、観世流でも江戸中期までは〝どうどうたらり〟であり、〝鳴るは滝の水……絶えずどうたり、ありうどうどう〟と謡つていたのである。観世宗家所蔵の観世大夫節付の本がそうなつていた。そこで私の興味は、何時から〝とうとう〟と清んで謡うようになつたかに向けられたが、これは案外手近な所に資料があつた。観世元章の明和改正謡本を見ると、〝とうとう〟の「と」の右肩に、一々「スム」と附記してある。濁音にきちんと濁点を付け、強吟と弱吟とを明示し、浮を「ウ」の記号で示すなど、明和本は節付法の上でも大改革を実施した本であるが、清んで謡うところにわざわざ「スム」と附記するのは普通でない。恐らく従来濁つて謡つていたのを初めて改めたために、特に注意を喚起すべく採用した方法なのであろう。元章がいかなる観点からドウドウをトウトウと改めたのかは、見当がつかない。トウトウタラリを聞きなれた耳にはその方が感じがいいかも知れないが、「鳴るは滝の水日は照るとも、絶えずとうたりありうどうどう、絶えずとうたり常にとうたり」の部分などは、滝のひびきの形容に転用されているところであるから、ドウドウである方が適わしい。

それはともかく、観世流が現在のようにトウトウと清んで謡うようになつたのは、観世




京都市中京区烏丸三条

能・お茶の御写眞

観世写真部

前島良彦
前島久男

芝白金今里町七七
電話大崎(44)一八四七五番
五〇〇九番

元章の明和改正謡本からであると私は推定している。明和本はあまりに改革が甚しく、また妥当でない点も多かつたので、元章の死後間もなく廃止されてしまつたが、部分的には改正の形式が残された点も少くはない。トウトウと清んで謡うことなどもその一例であろう。明和本のどのような改正点が後々まで残されているかは、卒業論文などに取扱う手頃な課題でないかと考えている。

トウトウかドウドウかの問題は、難解なことで有名な翁の詞章の意義を考える上に、大きな影響を与える。トウトウタラリはチベット語であるという説などは、トウトウであることを絶対的な条件としているものであるから、ドウドウが原形であれば、能勢先生の精細な反論を待つまでもなく、霧散消滅すべきものであろう。また「トウトウは笛の音取の譜」であるとされる高野辰之博士の説（日本歌謡史）も、ドウドウでは成立が困難ではないかと思われる。現今の観世流の謡い方に拠つて考えていたことが、従来の翁申楽説の共通の弱点であつたとも言い得るであろう。

## 蟬丸

申楽談儀に

逆髪の能に、宮の物に狂はん事、姿大事なりし程に、水衣をだみて着し時、世に褒美せしなり

とあるから、蟬丸を古くは逆髪と言つたらしい。この曲は世阿弥自身が演じ、また現在もかなり人気のある曲のようであるが、室町時代にはほとんど演じられなかつたらしい。能楽源流考の「演能曲目考」によると、高砂が八七回、山姥が五九回も演能記録が残つているのに、蟬丸は一回も無い。これは蟬丸が、大原御幸や砧などと同じく、室町後期には主として謡のための曲として伝えられていたためらしい。江戸時代になつても同様で、観世をはじめ四座一流の大夫の演能曲目書上にはほとんど蟬丸が入つていない。このことについては〝うたい（謡）考〟と題する小論に文学昭三十二年十月号）でふれたことがあるが、蟬丸はシテ、ツレ、ワキ三人共にそれぞれ謡い所があり、確かに素謡に適わしいように出来ているようだ。能としてよりも、音曲として優れている曲であるとも言えないだろうか。蟬丸や以前に取上げた弱法師のように、昔はあまり演じられなかつたのに今日ではしきりに演じられる曲、又その逆の曲などについて調べてみるのも興味ある課題である。





